「地名の歴史と伝承」第四話

牛久市文化財保護審議委員　栗原　功

地名苗字の牛久領主岡見・由良・山口各家と足利・織田・松平各家

平安時代初期（承平5年＝935年頃）、牛久（宇志久）と名乗り、牛久（元は宇志久）に住んでいた武士がいて、この武士は平国香（第50代桓武天皇の後裔。清盛は子孫）に仕えていた。国香は常陸大掾職（守・介につぐ職）にあり、真壁郡石田（現筑西市）に館を構えていた。

藤原北家系の八田知家は鎌倉幕府初代将軍源頼朝より文治5年（1189年）に常陸守護職に補任され、国政の中心地筑波郡小田（現つくば市）に居館を構え、八田の惣領家は代々小田と称した。小田家第7代治久の二男朝義は地頭職として河内郡岡見（現岡見町）に移住してきて城を構え岡見（尾上）を苗字に用いた。

第56代清和天皇の孫源経基の13代の子孫は新田義貞である。義貞が討ち死にしたので、四男貞氏が敵（足利尊氏軍）を欺くために苗字を横瀬に変え、その7代後の成繁が一族が用いていた地名苗字由良（上野国の由良郷（現群馬県））に変えた。成繁の跡を嗣いだ国繁は天正18年（1590年）に豊臣秀吉より領地牛久村外数カ村を宛行われて牛久城に移ってきた。

大内家は周防国外6カ国の守護職であったが、周防国吉敷郡大内畑から同郡山口（現山口市）に移り、盛幸の代に地名の山口をもって家号とした。盛幸の5代後の重政は、江戸幕府より牛久藩主に任ぜられ、山口家は代々世襲して明治維新に至っている。

源義家の孫義康が下野国（現栃木県）の足利庄に移住して足利を名乗り、平重盛系の織田信長の先祖は越前国丹生郡（現福井県）下の荘園名の織田を名乗り、徳川家康は24歳まで松平元康と名乗っていたが、松平とは先祖が三河国加茂郡松平郷（現愛知県豊田市松平町）からとったものだった。

武家の地名苗字赤松が赤城に
―赤城宗徳（元農林大臣）は子孫―

鎌倉時代末期の元弘3年（1333年）2月、第96代の南朝系後醍醐天皇が発した鎌倉幕府討伐の綸旨（命令書）に応じ、逸早く挙兵していた播磨国の豪族赤松円心（則村）は一千余の兵を率いて足利尊氏軍に合流。円心という人物は、政略戦略に群を抜いて秀で、戦巧者でもあったようだ。鎌倉幕府が倒れると、円心は後醍醐天皇に摂津兵庫（現神戸市）の福厳寺で謁し、軍功を賞され、同年の8月に同天皇による親政（※）が成ると播磨守護に任ぜられた。赤松家の出自は、第62代村上天皇の第7皇子具平親王の7代の後裔師季で、師季が播磨国佐用庄赤松村（現兵庫県赤穂郡上郡町赤松）に土着して地名の赤松を苗字に用いて興った。

建武2年（1335年）10月に尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻すと円心はこれに呼応した。

尊氏が、京都今出川室町において幕府を再興し、円心の献策で北朝系光明天皇の即位を断行して同天皇より征夷大将軍宣下を受けると円心は再び播磨守護に任命された。

円心の曾孫満祐の代での赤松家は、侍所所司（長官）と播磨・美作・備前三カ国守護とを兼管し、幕府最高職の管領職に就いている三管領家（斯波・細川・畠山の三家）に次ぐ権門の家柄七頭（赤松・山名・一色・京極・土岐・上杉・伊勢の七家）の一つに数えられ権勢をきわめていた。ところが、室町幕府第六代将軍に就任した足利義教は七頭と称されている家柄の一色義貫と土岐持頼を誅殺するなど万人恐怖政治を行った。満祐は、その矛先が自分に及ぶ前に義教を除こうと考え、嘉吉元年（1441年）6月に義教を京都西洞院二条の自邸に招いて酒宴の最中、手の者に暗殺させた（歴史上ではこの下剋上を〝嘉吉の乱〟という）。満祐は、ただちに自邸に火を放ち、本国播摩へ退いて、城山城（現兵庫県たつの市揖西町・新宮町の山頂尾根付近）に戻った。

京都では、看聞日記（後花園天皇、将軍家や諸守護の動静）に『義教の自業自得』と記している北朝系後崇光院伏見宮貞成親王（不即位太上天皇）や数多の武将が義教の恐怖政治を終焉させた満祐に同情を寄せていた。

9月になった。幕府の要請により、第102代後花園天皇（後崇光院伏見宮貞成親王の第一王子）が赤松満祐父子追討の論旨（命令書）を下すと、細川持常、山名持豊らが率いる3万余の軍勢が満祐父子らが籠城している城山城を十重二十重に囲んだ。満祐は二男教康、弟義雅、弟則繁、甥則尚外数多の一族の者に脱出して再起を図るよう厳命して一族69名とともに自刃した。満祐一族の数人の者は東国（関東）に落ち延び、常陸国に辿り着いて、一方の者は筑波郡の小田城主小田家に仕え、一方の者が真壁郡の下妻城主多賀谷家に仕えた。それより150年余が経った。戦国時代末期、小田家では赤松則実が主将として小田家外辺の手子丸城（現つくば市手子生）を守り、一方の多賀谷家の赤松常範は下妻城の枝城太田城（八千代町太田）を守備していた。

小田家が天正18年（1590年）に滅びて、多賀谷家が慶長6年（1601年）に徳川家康に所領を没収された。小田家に仕えていた赤松則実かその子が、真壁郡赤浜（現筑西市）に帰農して苗字を赤城に変え、江戸時代には赤浜村の名主を務めている。宗徳はその直系の子孫である。

※後醍醐天皇が政務（摂政・関白・征夷大将軍に政務を委ねないで）を執ったことをさす。

⬆永年勤続議員表彰受彰（在職25年）に際して演説中の赤城宗徳（昭和48年8月）※掲載に際して筑西市の赤城家よりご協力をいただいた。

【赤城宗徳略歴】

明治37年（1904年）真壁郡上野村（後の明野町・現筑西市）で生まれる。東京帝国大学（現東京大学）卒。昭和6年より同20年まで上野村村長。同10年より同14年まで県会議員。同12年に衆議院議員となり、戦前2回、戦後（一時公職追放される）13回当選。この間に農林大臣、内閣官房長官、防衛庁長官を歴任し、一方で自民党副幹事長、同総務・政務調査両会長、同茨城県連会長を歴任。赤城宗徳著・（株）文化総合出版刊『今だからいう』を要約してみると、岸内閣の下で昭和35年1月、日米安全保障条約（改定）が調印された。同年6月に至って『安保反対』の大合唱となり、戦後最大の反政府運動となった。折しも防衛庁長官の赤城は岸首相から、アイゼンハワー大統領訪日に際して警備に『自衛隊出動の強い要請を受けた』が赤城はこれを断った（事務次官と2、3の制服幹部も賛意を示していた）。